慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

慶應義塾大学病院グランドオープン

医学部開設100年記念事業の新病院棟に次いで新正面玄関とエントランスホールが完成

医学部開設１００年記念事業である新病院棟（１号館）建設事業は、２０２２年４月28日に竣工し、５月16日にグランドオープンを迎えました。この機会に慶應義塾始まって以来の大事業となった１号館建設のグランドオープンと新しく完成・オープンしたアプローチ空間をご紹介します。また、グランドオープンに先駆けて行われたテープカット式の様子もご紹介します。

写真１：上空から見た新しい慶應病院

写真２：グランドオープン当日

写真３：正門サイン

写真４：エントランスホール

■これまでの工事

１号館建設工事は、株式会社竹中工務店が設計施工者となり、２０１３年11月に６号棟などの解体工事からスタートしました。２０１５年にⅠ期棟、２０１８年にⅡ期棟がそれぞれオープンし、Ⅱ期棟オープン時には大規模な竣工式と内覧会を行ないました。その後、２号館整備工事を挟み、２０２０年10月から最終ステップとなるエントランス棟と駐車場を含む外構工事が再開されました。

この最終ステップの工事は、長年親しまれてきた病院の顔（１号棟、正面玄関、正門）が閉鎖・解体され、駐車場が一時的に紅梅寮裏に移転するなど、病院利用者の方々にはⅡ期棟完成までとは違った大きなインパクトを与えたのではないでしょうか。

■グランドオープン

最終ステップの工事は４月28日に竣工し、即日外部の歩行者通路が開放され、続いて５月５日に２００台強の収容台数をもつ正面駐車場が全面オープンしました。そして満を持して新正面玄関とエントランスホールのグランドオープンです。５月16日（月）７時45分、松本病院長が見守る中、多くの患者さんを混乱なく新しい玄関口から迎え入れることができました。これにより、計画から10年以上の歳月を要した１号館建設事業が完了となりました（写真１、２）。

■新しいアプローチ空間

新しくオープンした病院へのアプローチ空間は、これまでの１号館のデザインコンセプト「Keio Forest - 慶應の杜」のもと、大学病院が安らぎを提供できる場であるように工夫されています。

これまでの正門にあたる病院の敷地の入口部分は、病院の名称サインを置いた「杜のゲート」。この名称サインは、慶應義塾の伝統と信頼をコンクリートで、先進性と未来をガラスで表現しています（写真３）。

ここから正面玄関に至る歩行者用通路は、木々を配した「杜のプロムナード」。そのプロムナードに寄り添うようにあるのは、これまでもあったウッドデッキを拡張した「杜のテラス」。プロムナードをはじめ、アプローチ空間には様々な場所で休めるようにベンチを配しています。正面玄関前の広いスペースは、災害時のトリアージやイベントなど多目的に利用できる「杜のプラザ」となっています。

新正面玄関は、これまでよりも広くなった風除室内に体温測定器、手指消毒器、車椅子が置かれ、より円滑に館内にアクセスできるように工夫されています。

正面玄関を抜けたエントランスホールは、吹き抜け空間に木立をイメージした意匠が施され、ホール南端には福澤先生の胸像が新しい大学病院を見守るように置かれています（写真４、５）。

写真５：福澤先生像

写真６：テープカットの様子

写真７：テープカット式典集合写真

■テープカット式典

５月16日のグランドオープンに先立ち、新正面玄関に隣接するエントランスホールに於いて、２０２２年５月11日(水)にテープカット式典が取り行われました(写真６)。この式典には伊藤塾長、菅沼慶應連合三田会会長、武田医学部三四会会長をはじめ22名が列席し、伊藤塾長、北川常任理事、松本病院長の挨拶に続き、テープカットと記念撮影が行われました（写真７）。また、式典後に１号館をはじめとする信濃町キャンパスの施設見学が行われました。

■将来に向けて

長年におよんだ工事に際し、患者さん、教職員スタッフ、学生の皆さんには、度重なる騒音・動線の変更・移転作業など大変なご不便をおかけしてきました。皆様のご協力に改めて御礼申し上げます。

新病院棟（１号館）建設事業完了により、大学病院の施設環境は大幅に改善されましたが、病院施設をより良いものに改善しつづける作業が終わることはありません。次の１００年に向け、引き続き皆様のご協力をお願い致します。

病院エリアグランドオープンまでの道のりと未来へ向けた使命

信濃町キャンパス担当常任理事　北川　雄光（65回）

東京オリンピック・パラリンピックに向けた建設需要増大の影響により、当初予定からは2年余り遅れましたが２０２２年５月、病院エントランス棟、外構工事が無事終了し晴れて病院エリアはグランドオープンを迎えました。信濃町駅から横断歩道を渡ると緑に囲まれ広々としたアプローチが広がり、新しく生まれ変わった病院エリアに足を踏み入れるとご尽力くださったすべての皆様に対する感謝の気持ちと同時に、ここに至るまでの長い道のりがしみじみと思い起こされます。

２００７年４月、私が外科学教授を拝命した直後、当時の安西塾長のもと信濃町キャンパス改革・刷新プロジェクトが発足しました。慶應義塾創立１５０周年を目前に、待望の新病院棟を建設するためには信濃町キャンパスの大きな改革が必要であるとの理念のもと、新しい病院が建った時に現役教授として働いているであろう当時40歳代半ばの若手教授数名がこのプロジェクトに招集されました。安西塾長を中心に慶應義塾常任理事に加えて社会で活躍する理事・評議員の皆様が様々なアドバイスをくださるこのプロジェクトは若輩の私にとっては大変勉強になりました。

いよいよ新病院棟建設の機運が高まったところで社会全体がリーマンショックによる経済危機の直撃を受けました。清家塾長時代、２０１１年の東日本大震災の発生を受けて、厳しい財務状況の中でも病院としての安全性、耐震性の確保が急務となり、新病院棟建設事業が発足しました。当時の戸山常任理事、末松医学部長、武田病院長のもと建設計画の推進と募金事業が精力的に進められました。竹内病院長時代には、既存施設で診療を行いながらの工事となり、目まぐるしく動線が変化する中で着実に病院機能を維持しながら建設が進みました。長谷山塾長のもと、私が病院長を仰せつかって1年後の２０１８年に新病院棟１号館が竣工しました。２０１９年には皆様の大変な努力で病院は過去最高の高稼動を達成し、医療の質も病院経営も大きな発展を遂げました。

そして、記念すべき病院開設１００周年を迎えた２０２０年未曾有のコロナ禍に襲われました。院内感染や研修医集団感染など病院運営上も社会的にも当院は大きなダメージを受けましたが、三四会の皆様を含む慶應義塾社中すべての皆様の温かいご支援、信濃町キャンパス教職員すべての皆様、学生諸君の獅子奮迅の努力により、未だ予断を許さないコロナ禍の中で診療、研究、教学機能を回復し、現在の伊藤塾長、松本病院長のもと晴れてグランドオープンを迎えることができました。

我々の大きな目標は、独自の研究成果に基づいて新しい医療を創出し世界に冠たる医学府として社会を先導することです。この度のグランドオープンでその目標に向かって大きく歩み出す舞台の準備が整いました。一方、未来を切り拓く医療人、研究者を育むことは我々にとってさらに重要な目標です。医療系３学部の連携を深め、慶應義塾全体としてのグランドデザインの中で新しい人材育成の舞台を作っていくことが我々の最大の責務と感じております。

この大きな一歩に向けて多大なるご支援を下さった三四会の皆様に心から感謝申し上げ、これからも次のステージに向かって弛まぬ努力を積み重ねて参りたいと思います。

慶應義塾大学病院グランドオープンに寄せて

病院長　松本　守雄（65回）

慶應義塾大学病院はエントランス棟と外構整備工事が２０２２年４月末に完了し、ゴールデンウィーク明けの５月16日についにグランドオープンを迎えました。新病院棟のデザインコンセプトである「Keio Forest 慶應義塾の杜」を体現する植栽豊かな外構を通り、正面玄関に入ると建築、インテリア、デザイン、照明などが一つになって病院全体がやさしい杜のイメージで表現され、訪れる患者の方々やご家族にとって来院時にお感じになる緊張感を和らげる雰囲気を提供できると思います。また、正面玄関前のスペースには合計２０７台の駐車が可能な来院者用駐車場と車寄せも整備されます。

老朽化が著しい病院の建て替えを目指す新病院棟建設プロジェクトは２０１０年に新病院棟建設企画委員会が発足したことに始まります。２０１２年には「新病院建設を中核とした世界に冠たる総合医学府の構築」という目標のもと基本構想が策定されました。狭隘な信濃町キャンパスで医療を確実かつ安全に提供しながら新病院棟建設を行うために、綿密な医療機能のローリングと建物のスクラップアンドビルドの計画が策定されました。２０１４年、１号館Ⅰ期棟が着工され、２０１５年竣工、さらに２０１６年には本丸であるⅠ期棟が着工、２０１８年に竣工し、Ⅰ期棟とⅡ期棟が完全に一体化しました。地上11階、地下２階の免震構造の１号館（新病院棟）は２０１８年５月７日に開院し、本格的に稼働しました。当初、慶應病院開院１００年の年に当たる２０２０年に竣工予定であったエントランス棟と外構整備工事は、諸事情により予定より約２年遅れての竣工となりました。

足かけ10年にわたる一大プロジェクトが今回のグランドオープンにより完了したことになります。これには歴代の義塾、医学部、病院執行部のリーダーシップ、多くの関係者のご努力・ご尽力、また、三四会会員や慶應社中をはじめとする多くの皆様からのご支援の賜に他ならず、心から敬意を表するとともに感謝を申し上げたいと思います。また、患者の方々には、工事中度重なる動線の変更や駐車場不足などで大変なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、慶應病院に変わらずお越し頂いたことを大変有り難く思います。

この度のグランドオープンを機に信濃町教職員が心を新たに一丸となり、質の高い安全な医療を提供するとともに、研究、教育、イノベーションなどの分野も含めて慶應医学のさらなる発展を目指して参ります。

令和４年度全国三四会支部長会開催形式に関するアンケート結果

三四会会長　武田　純三（52回）
支部担当理事　堀内　行雄（52回）

三四会では毎年秋に全国支部長会を開催していましたが、ＣＯＶＩＤ-19蔓延のため令和２年並びに令和３年の２年間は開催を断念しました。令和４年の開催について三四会理事会で検討して参りましたが、オンラインを含めて形態を変えても開催しようということになりました。現況を踏まえて、開催に際して、本会の主体となる全国の三四会支部長の方々のご意見をお伺いしようということになりました。

２０２２年３月21日に各支部長67名にメールでアンケートをお送りし３月31日の締め切りまでに27名（40％）の支部長からご回答を得ることが出来ました。50回から78回の支部長から回答をいただきましたが、そのうち、海外の支部長１人は時差などの関係でＷＥＢ参加も難しいとのことで回答を辞退されました。

アンケートは、以下の如くで、希望する開催形式を各支部長に６案から選択していただくものとし、複数回答も可としました（15名が複数回答）。

案１：現地開催し、飲食を伴う会合をする。（通常開催）

案２：有志に集まってもらってホテル等の会場で支部長会を開催するが、懇親会はせず、弁当や飲み物を持ち帰っていただく。

案３：ハイブリッドで行い、遠方の支部長にはＷＥＢ参加してもらう。この場合には集まっていただいた支部長には案２と同様に懇親会はせず、弁当や飲み物を持ち帰っていただく。（遠方でも現地参加可能な支部長には参加してもらう。）

案４：ハイブリッドで行い、遠方の支部長はオンライン飲み会（参加者には宅配サービス）として参加を募る。

案５：ハイブリッドで行い、オンライン飲み会を希望する支部長（遠近を問わず）には宅配サービスを届ける。

案６：すべてＷＥＢで行う。飲食なし。

その他として、ご意見を付記していただくことにしましたが、特別なご意見はありませんでした。

集計結果は、表のようになりました。（○を１点、△を０・５点として集計）

この集計結果より次のように判断しました。

１　全集計、東京から支部への距離別、卒業回数別で比べても案３（ハイブリッド）が１番多かった。

２　案１（通常開催）と案６（ＷＥＢ開催）が、案３に次いで多く、その時のＣＯＶＩＤ-19の感染の状況により通常開催かＷＥＢ開催を判断することになると考えたものと思われる。

３　開催日を早めれば案６、遅らせることが出来れば案１に近づくものと考える。

令和４年５月の三四会理事会で全国三四会支部長会の開催日と開催形式を正式に決定する予定ですが、ＣＯＶＩＤ-19が収束し、通常開催ができることを祈っています。

現時点における全国三四会支部長会開催に向けての進捗状況をご報告しました。

＊全国三四会支部長アンケート集計結果（令和４年３月）
27名（67名中）40％回答（○を1 △を0.5として集計）（複数回答15名）

	全集計 27名	遠方（関東以外）11名	関東地区 16名	50～59回 18名	60回以降 9名
案１：通常開催　飲食有	11	4	6	6	4
案２：現地開催　飲食無　弁当持ち帰り	2	1	1	1	1
案３：ハイブリッド 現地での飲食無　弁当持ち帰り	17	7	10	12	5
案４：ハイブリッド 現地飲食有　遠方のみオンライン飲み会で参加可	0.5	0.5	0	0.5	0
案５：ハイブリッド 現地飲食有 遠近問わずオンライン飲み会での参加も可	3.5	1.5	2	1.5	2
案６：WEB開催　飲食無	10.5	3	8	7	3
辞退（１名）	1	1	0	0	1

第127回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナー

日　時　2022年６月25日(土)午後３：00～６：00
方　法　Web配信
※参加費無料・事前登録制（お申込多数の場合は先着順となります。）
※詳細は慶應義塾大学医学部のWebサイト（http://www.med.keio.ac.jp/）の『ニュース』をご確認ください。
参加対象　慶應義塾大学医学部、三四会、慶應医師会、慶應義塾大学関連・紹介病院、東京都地区医師会に所属する医師
講 演 会　『免疫異常がもたらす全身性免疫・炎症疾患』
モデレーター　金子　祐子
（慶應義塾大学医学部内科学教室（リウマチ・膠原病）教授）
１　「リウマチ・膠原病診療の進歩」
鈴木　勝也（慶應義塾大学医学部内科学教室（リウマチ・膠原病）准教授）
２　「成人の自己炎症性疾患の診断・治療・進歩」
川上　純（長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 先進予防医学共同専攻 リウマチ・膠原病内科学分野　教授）
３　「リウマチ学から見た、COVID-19 ～コロナウイルス感染、ワクチンと免疫応答～」
近藤　泰（慶應義塾大学医学部内科学教室（リウマチ・膠原病）助教））
日医生涯教育制度参加証交付　1.5単位(カリキュラムコード:73,73,8)
お問合せ　慶應義塾大学信濃町キャンパス総務課内　生涯教育研修セミナー事務局
Tel：０３-５３６３-３６１１　E-mail：med-somu-3@adst.keio.ac.jp
次回セミナー開催予定：2022年10月22日

第91回北里記念式の中止について

６月10日に開催を予定しておりました北里記念式ですが、新型コロナウイルス感染症の影響拡大を受けて、今年は中止とさせていただきます。なお、三四会賞(北里賞・北島賞)の受賞者については、三四会のウェブサイトにおいてお知らせいたします。

鑑賞知来

全世界がいまだＣＯＶＩＤ-19と奮闘している中、ロシアがウクライナへの軍事侵攻を開始した。これはまさに世界を震撼させるニュースで、多くのメディアがウクライナの被害状況を連日報道している。世界平和を謳うのが当たり前の現代においてなぜ今戦争なのだろうか。未曾有のバイオハザードから命を救うために奮闘しながら、命を奪う行為を目の当たりにするのは、社会の矛盾をつきつけられた思いになる。

いざ戦争がはじまると一般市民被害者の数や都市建築物の崩壊に目が当てられるが、兵士の被害も忘れてはならない。愛国心や政治信条を理由に他国の兵士を傷つける行為を擁護するつもりは毛頭ないが、戦地にいる多くの兵士にとって、戦う以外の選択肢がないことも事実であろう。自分と他人の命を天秤にかけざるをえない戦地では、否応なく多くの兵士が傷つき、倒れていく。

18世紀ナポレオン戦争において、そんな負傷した兵士を現場から搬出し、治療しようと試みたのが救急車の始祖と言われているが、その後４００年で戦火の医療は著しく進歩している。米軍では戦闘中の負傷による死亡をKilled in Action; KIAと定義し、その人数を公開しているが、第二次世界大戦で30万人近かったKIAは、10年弱続いたイラク戦争で５千人以下に止まっている。ロボットやドローンの軍事利用で、KIAの数は今後さらに減少するとも言われている。

では、現在のロシアのウクライナ侵攻ではどうだろうか。ＮＡＴＯや米国政府の見解では、実は３月までにすでにロシア側で１万人、ウクライナ側で５千人前後のＫＩＡが生じていると見込まれている。なぜそれほど多くの兵士が戦死しているのか、特に侵攻しているロシア側のＫＩＡの数には目を見張る。多くの政治的・経済的理由が憶測として飛び交っているが、真実は計り知れない。兎に角、一刻も早い戦争の終結を願ってやまない。

（救急医学　山元　良　85回）